

# アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代 –コンクール・デミュラシオンにおける18世紀の啓蒙性の継承と近代建築の予兆–

## Henri Labrouste's the Ecole des Beaux-Arts days: The Inheritance of Enlightenment in the 18th century and a sign of the modern architecture at the Competition of Emulation

白鳥 洋子  
SHIRATORI Yoko

キーワード：アンリ・ラブルースト、19世紀フランスの建築、エコール・デ・ボザール

Keywords：Henri Labrouste, French architecture in the nineteenth century, Ecole des Beaux-Arts

I review Henri Labrouste's excellence in classical architectural education, focusing on the system of architectural education at the Ecole des Beaux-Arts in the early 19th century and his projects presented at the Competition of Emulation. I will reveal the inheritance of the enlightening architecture of the 18th century and the sign of the modern architecture, which are seen in these projects and imply the later representative works.

### 1. はじめに

ピエール＝フランソワ＝アンリ・ラブルースト（Pierre-François-Henri Labrouste, 1801年5月11日パリ生まれ、1875年6月24日フォンテーヌブローにて死去）はサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館（Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850）、パリ国立図書館（Bibliothèque nationale, 1854-1875）の2作品で知られる<sup>1</sup>。両図書館において彼は記念碑的な公共建築に鉄構造を露出により使用し、古典主義の建築に近代の新しい技術を導入した早期の事例としてその意義が認められている。近代建築史においては鉄構造の新たな展開へ貢献したという技術的な観点から彼の革新性を認める見解が一般的である。西洋建築史においては、彼は19世紀フランスの古典主義の建築の系譜における厳格な規範の踏襲に対して合理主義を追求し、幅広い表現を許容するロマン主義を確立したとされる<sup>2</sup>。それにより狭義の古典主義からの「転換」に貢献し、その後の新たな潮流を築いた建築家として解釈される。

先の論文「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18世紀の革新性の継承」<sup>3</sup>では、彼の青年期に着目し、彼

が在籍したコレージュの特徴や教育理念、彼の師匠達の建築作品と思想について論考を行なった。それらには啓蒙的自由主義や理想主義的な前衛性が見られ、後の彼の前衛性や先駆性を予兆するものであり、同時に彼は18世紀の革新性の建築を継承する立場にあったことを明らかにした。本稿では、彼が在籍した19世紀初頭のエコール・デ・ボザールに着目し、同エコールの創設時の様子と彼の基礎の修学からローマ大賞設計競技参加資格獲得に至るまでの過程を概観し、現存する彼のコンクール・デミュラシオン（Concours d'émulation）の計画案についてその特徴の分析と考察を行う。これらを通じて古典的な教育の鍛錬においても秀でた能力を示したラブルーストがいかにして「革新性」や「転換」を導き出したのかについてその一端を明らかにすることを研究の目的とする。

ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代に関する先行研究は、ピエール・サディ氏の「エコール・デ・ボザール 1819-1825」(1977)<sup>4</sup>、ニール・レヴァイン氏の「1824年の大賞の設計競技：エコール・デ・ボザールの建築教育に関する事例研究」(1982)<sup>5</sup>などが挙げられる。本稿ではこれらの文献を参考にしながら論考を進めることとする。

### 2. 王立エコール・デ・ボザールの創設

ラブルーストは1819年に設立されたばかりの王立エコール・デ・ボザールに18才で入学した<sup>6</sup>。エコール・デ・ボザールと関係の深い芸術アカデミーは、革命以前は絵画彫刻、建築、音楽の分野に分かれたアカデミーであり、革命後に一つのアカデミーとして統合された<sup>7</sup>。それぞれの分野の芸術家たちの集まりが、17世紀のルイ14世(1638-1715)統治下のジュール・マザラン（Jules Mazarin, 1602-1661）宰相、ジャン＝バティスト・コルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683）財務総監、宰相の国家的芸術政策のもとに3つの王立のアカデミーとなった。芸術彫刻アカデミーはシャルル・ルブラン（Charles Le Brun, 1619-1690）の主導により1648年に設立され、音楽アカデミーは1669年に設立、その前身である音楽と詩のアカデミーは1570年に設立され、建築アカデミーは1671年に設立された<sup>8</sup>。同エコールの前身はこれらの3つの王立アカデミーに付属する教育機関であり、それぞれの部門に別の分かれた組織であった<sup>9</sup>。

フランス革命(1789-1799)の際には革命派の芸術家達が「芸術コミューン」を設立し、旧体制の芸術系の王立アカデミーは崩壊し、これら3つの芸術系アカデミーは1791年に廃止された。恐怖政治の時代ではジュリアン＝ダヴィッド・ルロワ（Julien-David Leroy, c. 1724, 1728-1803）はアントワーヌ＝ロラン・トマ・ヴォードワイエ（Antoine-Laurent-Thomas Vaudoyer, 1756-1846）とともにルーヴル内のルロワの公邸にて私的な教育期間としてエコール・デ・ボザールの活動を継続した<sup>10</sup>。ルロワはアカデミー付属時代のボザールで建築理論講義の教授をつとめ、フランスの最も早期のギリシア建築の研究書『ギリシアの最も美しい記念碑の廃墟（*Les ruines des plus beaux monuments de la Grèce*）』(1758)の著書により知られる。ヴォードワイエはラブルーストの師匠である<sup>11</sup>。

フランスでは1814年に王政復古がなされ、反動的な社

会情勢の中<sup>12</sup>、1816年に3つのアカデミーは統合され、一つの王立の芸術アカデミーとなった<sup>13</sup>。厳密には芸術アカデミーは1814年では王立であり、ナポレオンの復位した1815年は帝立であり、1815年のアカデミーの議事録にはナポレオンの署名がある。1816年の王立芸術アカデミーの会員はジャック・ゴンドワン (Jacques Gondouin, 1737-1818, 1795)、アントワヌ＝フランソワ・ペール (Antoine-François Peyre, 1739-1823, 1795)、ピエール＝フランソワ＝レオナルド・フォンテーヌ (Pierre-François-Léonard Fontaine, 1762-1853, 1811)、レオン・デュフルニー (Léon Dufourny, 1754-1818, 1796)、シャルル・ペルシエ (Charles Percier, 1764-1838, 1811)、ジャン＝フランソワ・ユルティエ (Jean-François Heurtier, 1739-1822, 1801)、ジャン＝バティスト・ロンドレ (Jean-Baptiste Rondelet, 1743-1829, 1815)<sup>14</sup>、ジャック＝シャルル・ボナール (Jacques-Charles Bonnard, 1765-1818, 1815) の8名である<sup>15</sup>。ゴンドワン、ペール、デュフルニー、ペルシエ、フォンテーヌは同会員であると同時に新しく設立された王立エコール・デ・ボザールの教授に就任し<sup>16</sup>、ここからは両機関の関係の深さを理解することができる。

同エコールは1816年12月18日の国王ルイ18世の勅令の発布により、「エコール・ロワイヤル・エ・スペシアル・デ・ボザール (École Royale et Spéciale des Beaux-Arts)」として設立が宣言され、その後3年間の準備期間を経て1819年8月4日のルイ18世の勅令により、同年に開学した<sup>17</sup>。ラブルーストが入学した1819年は同エコールが芸術アカデミーから独立し、一つの高等教育機関として実質的な教育が開始された年であった。彼は新しいボザールの第一期生にあたり、変革期を経て教育の再編成が行われていたボザールの教育を受けることとなった<sup>18</sup>。実際には前述のように革命期と帝政期の著名な建築家や理論家が教授となり、ローマ大賞 (Prix de Rome)<sup>19</sup> やコンクール・デミュラシヨンの制度も踏襲され、18世紀のアカデミー付属建築学校時代の教育は19世紀の王立エコール・デ・ボザールに概ね継承された。コンクール・デミュラシオンは月例のコンクールであり、エコール・デ・ボザールの教育的鍛錬の中核をなしていた。詳細を後述する。エミュラシオンは良い意味でのライバル意識や競争心を意味し、優秀者にはプリ・デミュラシオン (Prix d'émulation) が授与された。コンクール・デミュラシオンもローマ大賞と同様に18世紀のアカデミー付属建築学校でも行われ、18世紀の教育制度が19世紀の新しい王立エコール・デ・ボザールに継承された様子が理解できる。

### 3. 入学からローマ大賞設計競技参加資格取得まで

入学当初、ラブルーストは他の学生と同様に第2クラスへ進学し、ヴォードワイエとルバのアトリエに在籍した<sup>20</sup>。当時のボザールの建築部門は上級者を対象とした第1クラスと基礎養成の第2クラスに分かれ、学生の能力や熟達に応じて所属クラスが決められていた。彼は翌年の1820年には上級の第1クラス (première classe) への進級が許可され、1年で第2クラスを修了したことは異例の早さであり、彼の優秀性を示している<sup>21</sup>。彼はコレージュ時代からデッサンで最優秀賞を受賞するなどの優れたデッ

サン有能力を持ち、同時に数学が得意であった彼は建築表現の上達が早く<sup>22</sup>、当時の文献にはボザールの教授達がラブルーストの上達の早さに注目していたとする記述が残されている<sup>23</sup>。

さらに彼は第1クラスに昇格した後の、僅か1年後、1821年にローマ大賞設計競技参加資格を得た。彼は第1クラスでは月例のコンクール・デミュラシオンに積極的に参加し、相次いで成功を収め、8つのメダルを獲得したとする記述が残されている<sup>24</sup>。エコール・デ・ボザールのカリキュラムはコンクール・デミュラシオンが中心をなし、このコンクールでの入賞や獲得したメダルがヴァール (valeurs) というポイントに換算された。これによりローマ大賞設計競技参加資格の有無が判断された<sup>25</sup>。コンクール・デミュラシオンに入賞できない者は修学年数に関係なくローマ大賞設計競技の参加資格を得ることができず、参加することさえも困難であった。同時にコンクール・デミュラシオンを通じて学生達は実力を付け、ローマ大賞設計競技優勝へと挑戦して行った様子が伺えた。

ラブルーストは1821年にローマ大賞設計競技の参加資格を得ると直ぐに参加し、初回の参加で次席 (le deuxième grand prix d'Architecture) に入選した<sup>26</sup>。1821年の課題は「裁判所 (Palais de Justice)」であり、ギョーム・アベル・ブルエ (Guillaume Abel Blouet, 1795-1853) が優勝し、ローマ大賞を受賞した<sup>27</sup>。ボザール在籍2年目、20歳の準優勝も異例の成功であり、これらにより彼は将来が期待される傑出した人材であることが示された。その3年後の1824年に彼は再度ローマ大賞に挑戦し、優勝を果たした<sup>28</sup>。1824年の課題は「最高裁判所 (Cour de cassation)」であった。23歳のローマ大賞受賞は20歳の準優勝と同様にその若さが特筆され、彼の優秀性を物語っている。19世紀の文献ではラブルーストの優秀性は「彼は僅か23歳でしかなく」<sup>29</sup>、「ラブルースト氏のデビューの衝撃」、「その速さ」、「彼の才能に相応しい記し」<sup>30</sup>と熱のある筆調で賛辞されている。

1822年と1823年の2年間、ラブルーストは参加資格を有していたにも関わらず、参加を見送っていた。これは同じくローマ大賞を志す兄テオドール・ラブルースト (Théodore Labrousse, 1799-1885)<sup>31</sup> に対する配慮であり、テオドールは参加の年齢制限が近付いていた<sup>32</sup>。1822年のプログラムは「オペラ座 (Opéra)」であり、1823年のプログラムは「税関庁舎 (Hôtel des douanes)」であり、ラブルーストはこれらのプログラムに関する図面を残しており、傾向を分析し対策を立てるなどのローマ大賞設計競技への準備をしていた様子が伺え、同時に彼のローマ大賞獲得への意欲が伺えた<sup>33</sup>。一方、この1823年には彼は前述のようにコンクール・デミュラシオンで成功を収め、その年に最も優秀であった学生に授与される部門賞、プリ・デパルトモンタル (Prix départemental) を受賞した<sup>34</sup>。プリ・デパルトモンタルを受賞した翌年にローマ大賞を受賞するケースが多く、同賞の受賞者はローマ大賞に最も近い人物であることを示していた<sup>35</sup>。

### 4. コンクール・デミュラシオン

ラブルーストが相次いで成功を収めたことと記述が残るコ

ンクール・デミュラシオンについて、1818年から1824年にかけて彼がエコール・デ・ボザールに在籍した時代に制作した計画案の図面が残されており、図面が現存する作品は「教会 (Église)」(1820)、「自然学者の家 (Maison d'un naturaliste)」(1822)、「旅芸人劇場 (Théâtre foraine)」(1822-1823)、「埋葬の礼拝堂 (Chapelle de funéraire)」(1818-1824) などが挙げられる<sup>36</sup>。これらの図面はエコール・デ・ボザール<sup>37</sup>とアカデミー・ダルシテクチュール (Académie d'Architecture)<sup>38</sup>に収蔵されている。アカデミー・ダルシテクチュールの前身は1840年に設立された中央建築家協会 (Société centrale des Architectes)であり、同協会は自由な建築家の集団であり、専制的な芸術アカデミーとは対照的な組織となった。ラブルーストはメンバーとして創設に尽力し、1873年には会長職も務めた<sup>39</sup>。ラブルーストのデッサンは1976年のパリとニューヨークで開催された展覧会を契機に、イヴォンヌ・ラブルースト夫人 (Mme Yvonne Labrouste) の寄贈とレオン・マルコット = ラブルースト夫人 (M. Léon Malcotte-Labrouste) の委託を受け、以後同アカデミーが所蔵している<sup>40</sup>。

#### 4-1. 教会のプログラムにおける意匠の変遷と構造

18世紀の両コンクールの作品を概観すると<sup>41</sup>、「教会」のプログラムは18世紀のコンクールでもしばしば出題され、ボザールの伝統的な課題の一つと言える。18世紀の教会のコンクールの作品では、年代により形式や意匠に異なる傾向や特徴がある。1760年代と1770年代では頂部にドームを戴いた形式と主にコリント式のオーダーを採用した華麗な装飾意匠に特徴のある計画案が多く見られる (図1)。これは同時期に設計と工事が行われていたジャッ



図2：プリウール (Prieur)、「教会の正面玄関」、立面図、プリ・デミュラシオン、1784年、ENSBA。

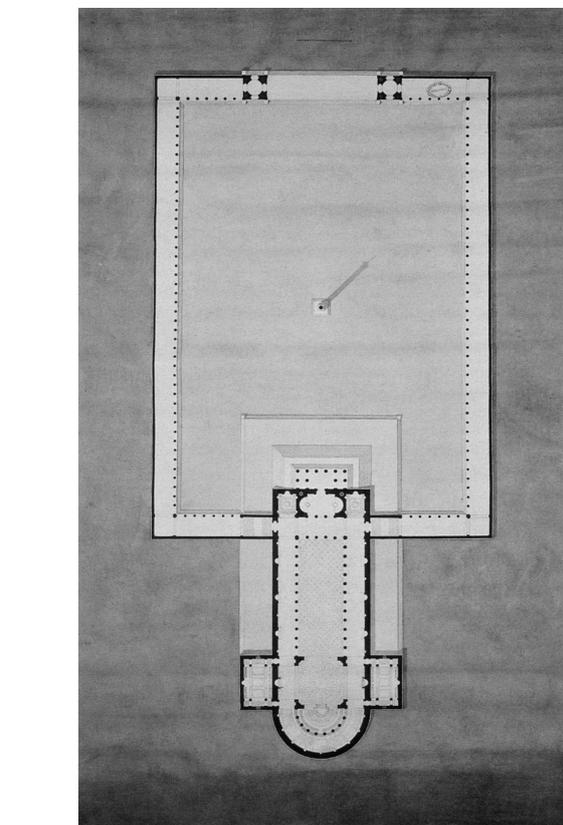
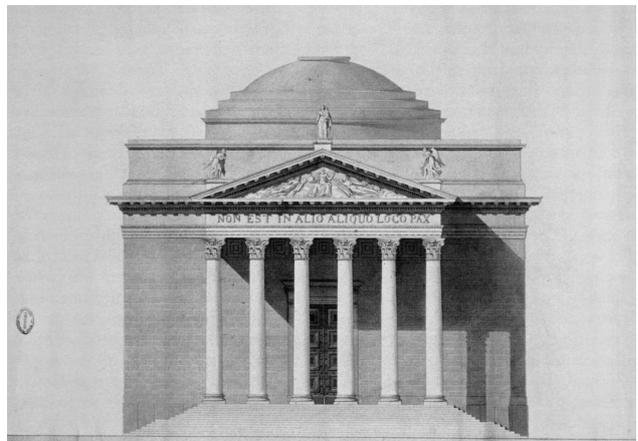


図3、図4：アンリ・ラブルースト、「教区の教会の計画案」、立面図、平面図、1820年、ENSBA。

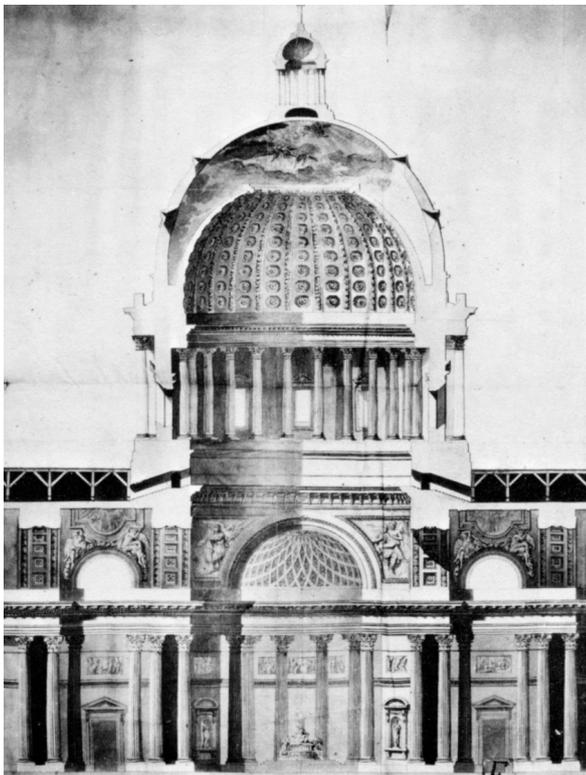


図1：テュラン (Turin)、「大聖堂のドームの計画案」、8月のプリ・デミュラシオン、1779年、ENSBA。

ク＝ジェルマン・スフロ（Jacques-Germain Soufflot, 1713-1780）のサント＝ジュヌヴィエーヴ聖堂（Église Sainte-Geneviève, 1755-1792）、現パンテオン（Panthéon）に類する構成と意匠であり、ここからは、同聖堂でスフロが目指した「ゴシックの建造物の構造がもつ軽やかさを、ギリシア建築の純粹さや壮麗さと結びつける」試みであるグレコ・ゴシックの理念と、ギリシアの神殿にローマのドームを載せる意匠構成が、エコール・デ・ボザールの学生や指導者達からも受容され、エコール・デ・ボザールの教育においても一つの潮流を築いていた様子を理解することができる。

一方、1780年代からコンクール作品の意匠の傾向に変化が現れ、装飾の少ない簡素な壁面に主に6柱式のギリシア・ローマ神殿のペリステイルをポルティコとして配置したファサードと上部に緩やかなドームを載せた構成に特徴を持つ作品が多く見られるようになった（図2）。これはネオ・グレックの傾向であり、ここからはエコール・デ・ボザールの意匠傾向が1760、70年代のグレコ・ゴシックから1780年代のネオ・グレックへ移行した様子や変遷を理解することができる<sup>42</sup>。

エコール・デ・ボザールに収蔵されているラブルーストの1820年の「教会」の計画案（図3）は、しばしば「教区の教会の計画案」と記されている。教区内の小規模な教会の設計が主題であり、後述のルイ＝イポリット・ルバ（Louis-Hippolyte Lebas, 1782-1867）の作品、ノートル＝ダム＝ド＝ロレット教会（Église Notre-Dame-de-Lorette, 1823-1836）と同様の主題である。ラブルーストの教会の計画案のファサードの構成は、先に例を挙げた1780年代のコンクール・デミュラシオンの入賞案（図2）と基本的に同じ類型であることが理解できる。簡素な壁面に6柱式のギリシア・ローマの神殿のファサードを配置し、異なる箇所は、高さ方向のプロポーションの僅かな相違や、イオニア式とコリント式のオーダーの相違、ペディメント上部の彫像の有無、アティックの有無などであり、詳細な事項においてである。19世紀のエコール・デ・ボザールでの意匠踏襲は厳しく、しばしば創造性の欠如が指摘されるが、これらの計画案の類似性からも、18世紀末の構成と意匠形式が19世紀前半までの約35年もの間、エコール・デ・ボザールでは模範の意匠が踏襲されていた様子を理解することができる<sup>43</sup>。

これらの図版からはラブルーストがエコール・デ・ボザールでのアカデミックで同時に画一的な訓練にも従い、実力を付けて優秀性を発揮していた様子が理解でき、昇級の速さや受賞歴からは彼が教授達からも高く評価されていた様子を理解することができる。ラブルーストは後に「当時は学生を『デシナター（dessinateurs 製図画家）』に育てていて、そして、建築学校の展示ではその様子が見られ、ペリステイルや凱旋門の意匠は先生方の意匠を逸脱しなかった<sup>44</sup>と当時の様子を回想し、意匠踏襲の不自由さと繰り返しを柔らかく批判している。19世紀のローマ大賞を概観すると、18世紀後半に現れた前述の意匠構成が入賞作品に頻繁に採用されており、ここからはラブルースト達の世代においても各種コンクールでこの構成が繰り返し採用されたことを理解することができる。これは意匠形式が一

つの普遍性を持ったと解釈することができるが、創造性の欠如や規範による意匠の束縛でもあり、後にエコール・デ・ボザールで起きた様々な論争や教育改革の試みを考慮すると意匠の専制性とも解釈できる。

彼の計画の配置では列柱で囲まれた長方形の前庭の幾何学が1：1.4の概ね長方形黄金比であり、硬質感があり、彼の個性が感じられる。教会本体は伝統的な十字型平面であり、内部の2本の列柱により身廊と側廊が作られ、一般的な構成である。特徴は構造への配慮にあり、ラブルーストの個性や着眼点を理解することができる。身廊と翼の交差部には4つのL字のピアが設けられ、上部のドームを支えている。加えて、廊と翼の間には堅固な壁が設けられ、側廊の壁面が内部に連続している。一般的な教会ではこの箇所には壁面を設けず、空間が連続することが多い。4つのピアは上部のドームの荷重に対する配慮であり、堅固な壁面はおそらく水平力に対する配慮であると思われる。

4つのピアと堅固な壁面は前述のサント＝ジュヌヴィエーヴ聖堂、現パンテオンで行われた構造の限界に挑戦する実験的な試みと、その後に行われた構造補強と同様の考え方である。スフロの同聖堂では、当初上部のドームを8本の柱で支持する大胆な試みであったが、構造的疑問から4つのピアに変更され、それにも関わらず、ピアに亀裂が入り、その後に様々な構造補強が行われた。ここからはラブルーストがスフロのサント＝ジュヌヴィエーヴ聖堂の設計と計画、ピアの亀裂、後の構造補強について認識を深めていた様子が理解できる。ラブルーストが8歳から18歳までの10年間をパンテオンの脇向かいにあるコレージュ・サント・バルブ（Collège Sainte-Barbe）で過ごしたことは先の論文で詳細を述べた<sup>45</sup>。この計画案の平面と構造からは幼少期から身近であったパンテオンがラブルーストのエコール・デ・ボザール時代での修学にも生かされていた様子が理解でき、同時に彼のスフロの試みに対する認識を理解できるという観点から興味深い。

#### 4-2. 教会の意匠構成と描写の習作

1819年の第2クラス時代に描かれた透視図の習作「古代の建造物」（図5）ではラブルーストの描写表現力の高さが伺え、同時に個性的な箇所が見られる。一般的にボザールでは教会の平面形式は伝統的な十字型であるが、これに対してこの計画案では串字型であり、そこに特徴を認められる。これにより側面方向に各2つ計4つの小ヴォリュームが突き出すことになり、独特な外観が形成されている。ファサードは4柱式のイオニア式オーダーであり、コーニ



図5：アンリ・ラブルースト、透視図の習作「古代の建造物」、1819年、AA。

スの出が大きく、軒蛇腹が大振りである。これはイオニア式のファサードを正確に再現しているようであり、イオニア式はコリント式と比べてコーニスや軒蛇腹が大きい。適切な構図と正確なパースライン、陰影の強い構成、石の量感や硬質な描写、石積みを図示した緻密な表現などに、彼のアカデミックなデッサン力の高さを伺い知ることができる。しばしば19世紀の文献でラブルーストの描写能力の優秀性に関する言及が見られるが、これらの言及の通り彼はボザールの1年生、19歳でこのデッサンを描いていた。

この教会の構成は後にバシリカ平面により、ラブルーストの師匠の一人、ルイ＝イポリート・ルバの作品、ノートル＝ダム＝ド＝ロレット教会で実現した<sup>46</sup>。同教会は1823年のコンクールにより優勝したルバが設計を行った。バシリカ平面にギリシア・ローマ神殿のファサードを適合させた形式であり、在ローマ・フランス・アカデミー奨学期間のラブルーストの研究成果「アントニヌスとファウステイナの神殿 (Temple d'Antonin et Faustine, 141)」と、兄テオドール・ラブルーストの研究成果、コリの「ヘラクレス神殿 (Temple d'Hercule à Cori, 紀元前1世紀初頭)」が採用されている<sup>47</sup>。

ラブルーストが19歳で描いたデッサンでは、「ヌマの墓



図6：アンリ・ラブルースト、デッサン「ヌマの墓碑」、1819年、AA。

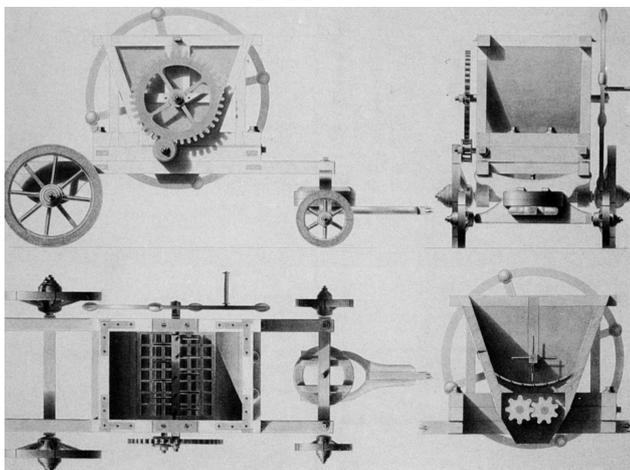


図7：アンリ・ラブルースト、デッサン「葡萄の果梗を取り除く機械」、c.1818-1819年、AA。

碑 (Tombeau de Numa<sup>48</sup>, 1818)」(図6)、「葡萄の果梗を取り除く機械 (la machine à égrapper)」(図7)などが残され、これらからも緻密な描写と適切な遠近感などに彼の秀逸なデッサンの実力を認めることができる。前者は、伝説的なローマ第2代の王ヌマ・ポンピリウス (Numa Pompilius) を主題とした絵画的なデッサンであり、ここからは彼自身も師匠ヴォードワイエも建国期の古代ローマの文化や芸術に関心を寄せていた様子が理解できる。ヌマが建造したとされるヤヌス神殿<sup>49</sup>はエコール・デ・ボザールでもしばしば研究対象となった。このデッサンからは古代ローマの意匠や慣習に対する彼の自然な探究心が感じられ、ボザールの古典踏襲とは異なる古代探求の側面が伺えることが興味深い。

後者は後のラブルーストの美しい鉄構造を予兆させるデッサンであり、彼は19世紀では芸術の対象とは見なされなかった機械を精確な形態、陰影による立体感、美しい水彩などのボザール式表現により仕上げている。純粋芸術と機械の美学の同時性は全く彼の将来を予兆させるものである。彼は「葡萄の果梗を取り除く機械」の他にも「栓抜き」、「压榨機」など様々な機械や道具に関するデッサンを描いており、6葉が現存している。6葉は多いと判断され、彼の機械への嗜好が良く理解できる。

#### 4-3. 自然学者の家のプログラムと18世紀の啓蒙性

1822年の「自然学者の家」(図8)のプログラムは「深さ50mの谷の底にあり…、住民の建物、自然三界<sup>50</sup>の希少な産物を収集するためのギャラリー、図書館、二つのパヴィヨン、温室、鳥舎、動物園、泉水、小農園などを配置する」<sup>51</sup>とあり、一種の自然史博物館に関する大規模な施設であった。このコンクールでラブルーストは準優勝となり、メダルを獲得した。優勝は生涯の友人として親交があったフェリックス・デュバン (Jacques Félix Duban, 1797-1870)<sup>52</sup>であった<sup>53</sup>。規模の大きいこの計画案の幾何学による壮大な構成は18世紀の革命期の建築からの流れが伺える。この頃の制作ではラブルーストは平面の構成では幾何学を重んじていて、他の制作「浴場 (Bains)」(図9)や2年後にローマ大賞を受賞する「最高裁判所」、後の二つの図書館においても平面を正方形や正円、その派生形の長方形による幾何学の組み合わせを主要な構成としている<sup>54</sup>。ここからは師匠アントワヌ・ヴォードワイエと、フランスの伝統的な建築に正方形幾何学のモジュールを与え、合理主義の確立に貢献したジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン (Jean-Nicolas-Louis Durand, 1760-1834)<sup>55</sup>の流れを汲んでいる様子が伺える。

ローマ大賞設計競技では自然史博物館に関するプログラムは18世紀では稀であり、19世紀では幾つかの事例があった。18世紀では近い例として彼の師匠アントワヌ・ヴォードワイエが優勝した1783年のローマ大賞設計競技「主君の城館の庭園内に設けられる動物園 (Une ménagerie renfermée dans le parc du château d'un souverain)」が挙げられる<sup>56</sup>。19世紀では1827年のテオドール・ラブルーストが大賞を受賞した「自然史博物館 (muséum d'histoire naturel)」が挙げられ、本人と近い人物がこの主題で能力を認められている。他には1832年

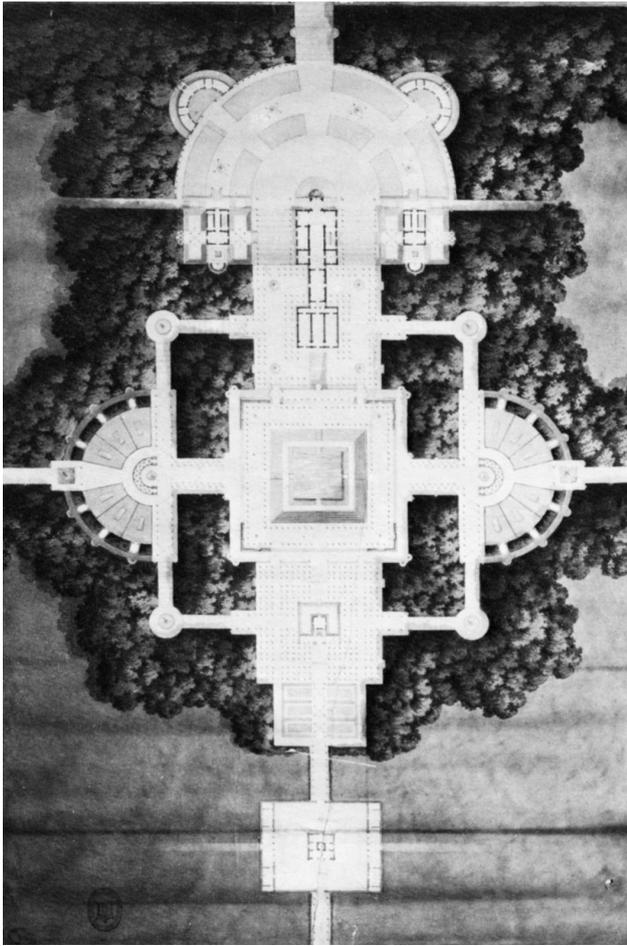


図8：アンリ・ラブルースト、「自然学者の家」、コンクール・デミュラシオン、準優勝、1822年、ENSBA。

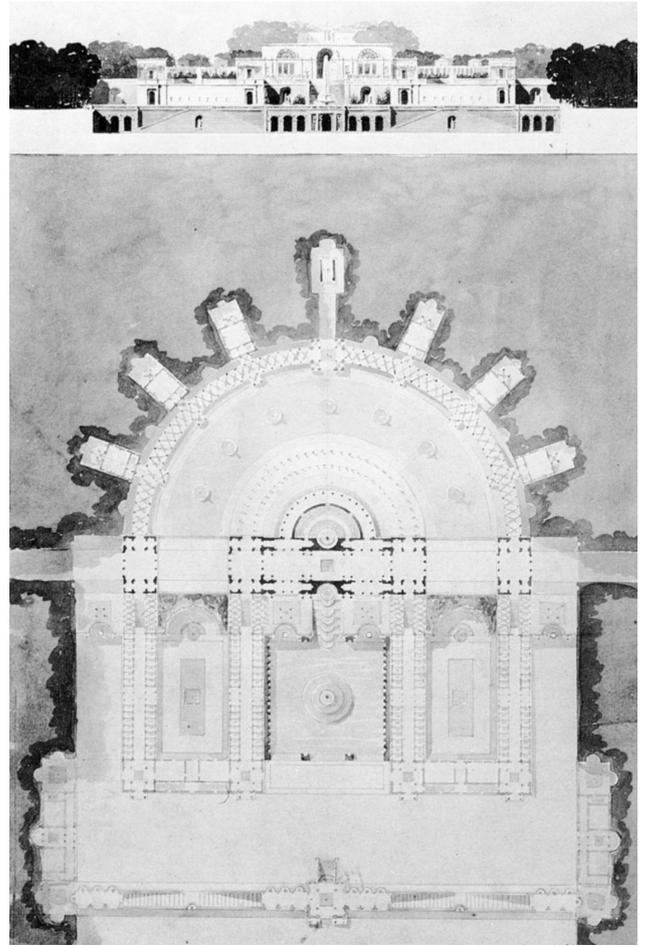


図9：アンリ・ラブルースト、「浴場」、c.1818-1824年、ENSBA。

にジャン＝アルノー・レヴェイユ (Jean-Arnaud Lèveil, 1806-1866) が大賞を受賞した「博物館 (muséum)」、1846年にアルフレード＝ニコラ・ノルマン (Alfred-Nicolas Normand, 1822-1909) が大賞を受賞した「自然史博物館」、1872年にスタニラス＝ルイ・バルニエ (Stanislas-Louis Bernier, 1845-1919) が大賞を受賞した「自然史博物館」などが挙げられる<sup>57</sup>。

自然史博物学のプログラムは旧王立植物園、現パリ植物園 (Jardin des Plantes de Paris) を想起させるものであり、ヴェルサイユ宮殿内にあった王立動物園は1793年にパリの王立植物園内へ移転した。大著書『博物誌』で知られるジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォン (Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707-1788)<sup>58</sup>はこの王立植物園の園長であった。1889年には同園にルイ＝ジュール・アンドレ (Louis-Jules André, 1819-1890) による自然史博物館 (le Muséum national d'histoire naturelle) が開館した。ジュール・アンドレはラブルーストのパリ国立図書館の建設で設計工事補助を行なった建築家である<sup>59</sup>。ラブルーストが活躍した19世紀後半のパリでは、博物館や図書館などの学問の建築と鉄構造の建築は同時であることが多く、また設計した建築家達が互いに友人であり、同じアトリエの出身であるなどの交流がある場合が多く見られる。植物園、自然史博物館の主題は学問を重んじる18世紀の啓蒙主義の流れを汲んだ建築であり、同時に学問と公共性、

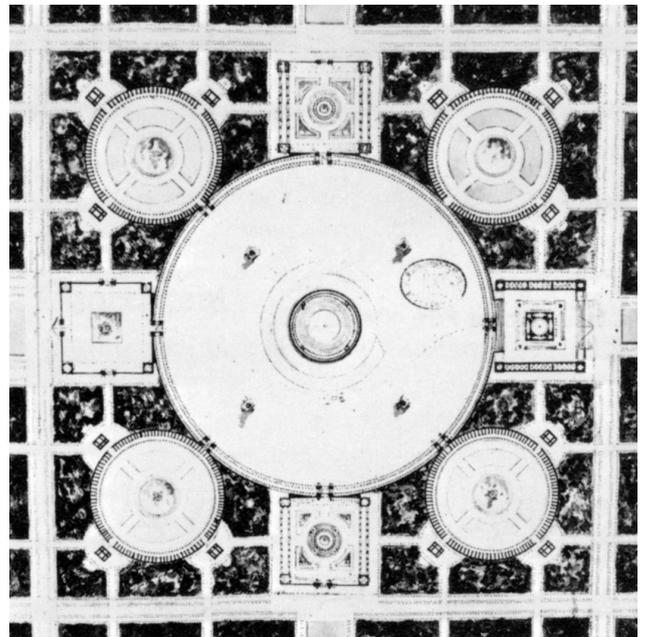


図10：アントワヌ・ヴォードワイエ、「動物園」、ローマ大賞、1783年、ENSBA。

鉄構造の技術的先進性の観点から近代的であると言える。ヴォードワイエの弟子達、ラブルースト兄弟はこうした知的分野の建築で能力が認められた<sup>60</sup>。

#### 4-4. 埋葬の建築と18世紀革命期の建築

ラブルーストはエコール・デ・ボザール時代に埋葬に関する計画案を制作しており、「埋葬の礼拝堂」(図9)はその一つである。この計画案では、地上階には礼拝堂と墓廟が点在する庭園を配置し、地下階に墓廟室とそれらにアクセスする大小の廊下を設けた構成となっている。半円形のドラムに大きな4分の1球体を乗せる構成、緩やかな球体屋根の形態、その頂部の天窓から光が差し明暗の構成、装飾性を抑制した意匠が見られ、ここにはエティエンヌ＝ルイ・ブーレ (Etienne-Louis Boullée, 1728-1799) のニュートン記念堂案 (cénotaphe à Newton, 1784) などに代表されるフランス18世紀の革新的な建築、理性の時代の建築からの潮流を認めることができる。内部空間はフランス議事堂のようでもあり、この計画案は「議事堂 (Assemblée)」と表記されることもある<sup>61</sup>。18世紀に草案された議事堂の計画案は現在の議事堂と同様に4分の1球体の空間で考案された。

この「埋葬の礼拝堂」の計画案と同じ種類の建築としてレオナルド・フォンテーヌの「贖罪の礼拝堂 (Chapelle expiatoire, 1816-1824)」が挙げられ、両者は小さな礼拝堂、墓碑が配置された長方形平面の中庭などに共通性が認められる。ラブルーストのもう一人の師匠イポリート・ルバはフォンテーヌの贖罪の礼拝堂の設計補助を行っており、フォンテーヌはクロード＝ニコラ・ルドゥー (Claude-

Nicolas Ledoux, 1736-1806) のパリの一連の入市税徴税請負人の関門の設計補助を行なっている<sup>62</sup>。ルドゥー、フォンテーヌ、ルバ、ラブルーストの順で設計補助を通じた師弟関係に近い建築家の流れがあった。

#### 4-5. 旅芸人劇場のプログラムと19世紀の近代性

1822、1823年頃にコンクール・デミュラシオンで出題された「旅芸人劇場」(図8)はエコール・デ・ボザールのプログラムとしては稀なものである。ローマ大賞設計競技においてはオペラ座や劇場は時折出題があるが、旅芸人劇場はない<sup>63</sup>。パリには中世からの旅芸人の劇場 (théâtre de la foire) の歴史があり、教会や修道院で開催される市 (foire) の日に旅芸人の催しが行われていた<sup>64</sup>。教会や修道院の市では旅芸人たちの大衆劇、奇術、舞踏、音楽、人形劇などが行われ、場所によっては芝居小屋などの簡易な建築物を有していたこともあった。具体的にはサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院 (abbaye Saint-Germain-des-Prés) やサン＝ローラン教会囲い地 (enclos Saint-Lauren) などの市は芝居小屋を持っていた。旅芸人は自由と流浪の民であり、時には貴族や聖職者と契約を交わして安定収入を得る者もあり、17世紀、18世紀では宮廷に仕える者もいた。フランス革命の聖職者追放と教会、修道院への破壊略奪行為の中でこれら芝居小屋は閉鎖された<sup>65</sup>。

18世紀のローマ大賞では「教会」、「宮殿」がしばしば出題され、支配階級の建築が中心であったことに対して、19世紀における「旅芸人劇場」のプログラムは大衆娯楽の肯定や復活を示すものであり、市民性と公共性の観点から近代的であると言える。これは19世紀のエコール・デ・ボザールの建築部門の教授達がコンクール・デミュラシオンの中で市民性を持つ近代的な施設の建築を思案していたことを示している。これはしばしば権威主義的傾向が指摘されるエコール・デ・ボザールの印象とは異なる側面であり、興味深い。

ラブルーストの計画案では平面は3つの正方形と幾何学的に合致した半円形と長方形により構成され、前述の「自然学者の家」と同様に硬質な幾何学で纏められている。構造は石造と思われる壁面に登り梁に類する簡潔な木造の屋根を掛けている。圧縮力に対して石造、引張力に対して木造とし、適材適所の構造となっている。天井は客席においても舞台においてもロングスパンを飛ばし、傘に類する屋根を棟持ち柱なしに両端の壁面で支える考え方である。屋根の開く力に起因する横圧に対しては、開く方向に壁面と円柱の組み合わせが配置され、水平力に対する構造的配慮が見られる。二つ一組のコロンヌ・クプレ (colonnes couplées) は構造的に補強しておきたい箇所に配置されており、これはコロンヌ・クプレを内部の空間を豊かにする装飾芸術としての役割に加えて、構造的な有効性を持たせようとする意図があったと解釈することができる。こうした構造の考え方は後の代表作である二つの図書館に見られる構造意匠に近い発想であり、鉄構造の技術的な挑戦や技術と意匠の同時性などの後の彼の活躍を想起させる。

劇場計画について舞台はプロセニウム形式であり、客席は円形傾斜席と並列平土間席の組み合わせである。主舞台は広く奥行きが深く、側舞台はコンパクトに設けられ、舞

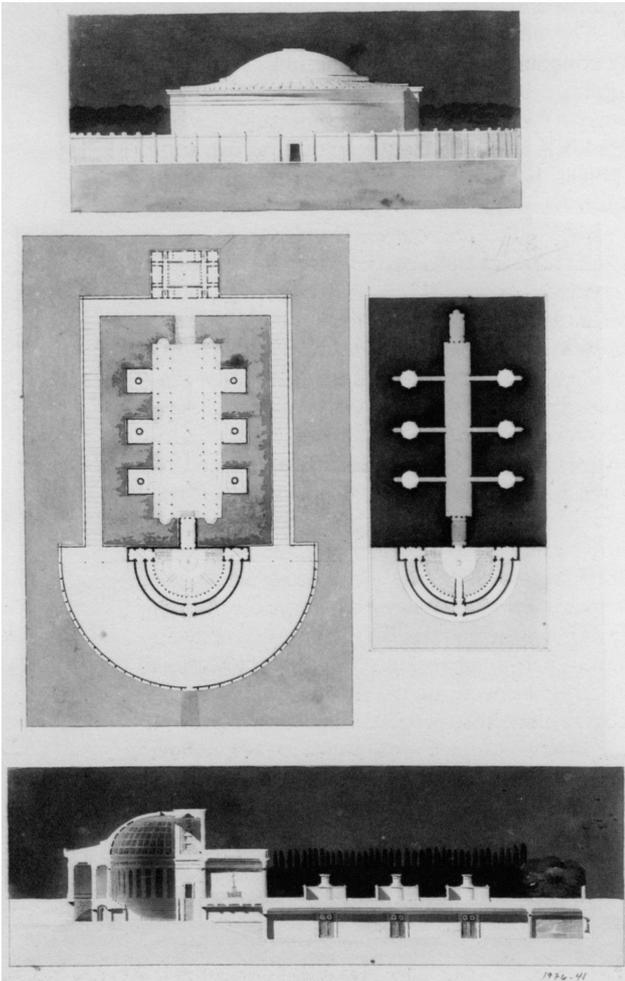


図11: アンリ・ラブルースト、「埋葬の礼拝堂」、(c.1818-1824)、AA。

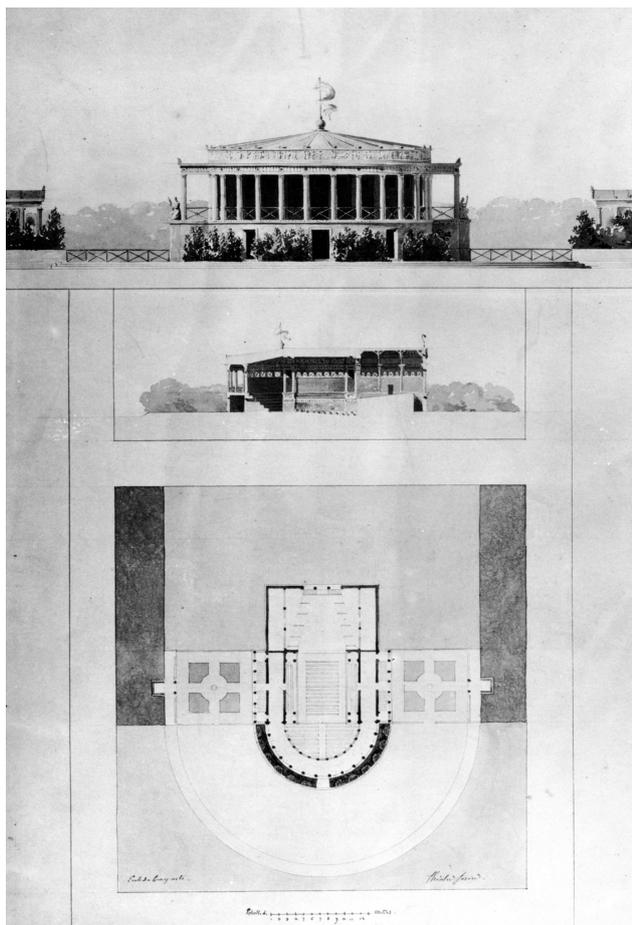


図12：アンリ・ラブルースト、「旅芸人劇場」、コンクール・デミュラシオン、1822-1823年、AA。

台のパースペクティブや書割などの舞台背景の出し入れに対して配慮され、彼の建築計画の能力を知ることができる。舞台最深部中央から役者が階段を登って登場する構成であり、中心軸上の視線の焦点からの人物の登場は劇的である。舞台は客席からの見え方に配慮した傾斜舞台であり、細やかな配慮が感じられる。全体的に簡潔であり、均整のとれたプロポーションと自然な発想を感じられる構造と構成に魅力があり、楽しげな様相が街の人々の劇場に相応しい。

構造と外観、劇場の性格などにおいて後に建設されたジャック＝イニャス・イトルフ (Jacques-Ignace Hittorff, 1792-1867)<sup>66</sup> の設計による旧パリ馬術劇場、シルク・デテ (夏のサーカス Cirque d'été, 1833-1841)、旧パリ・サーカス劇場、シルク・ディヴェール (冬のサーカス Cirque d'hiver, 1852)<sup>67</sup> に近い。シルク・ディヴェールの屋根は傘の考え方に近いロングスパンの架構であり、中心に木造の架構材が集まる構造である。こうした事例からはエコール・デ・ボザールでは近い将来に建造が予定される施設についてローマ大賞やコンクール・デミュラシオンで試案検討をしていた様子は何える。加えて、アカデミーの会員でもあったことが多いエコール・デ・ボザール教授を担った建築家たちがこうした旅芸人の劇場のような街の人々の楽しみの建築の実現に好意的であった様子は新鮮である。一方、両建築家は鉄の構造、古代建築の研究などにおいて共通性を持ち、両者にはデッサンの貸与などの交流があった。ラブルーストは在ローマ・フランス・アカデミー時代に古代の墳墓

の色彩の施された建築意匠の壁画を多数描き写して、これらのデッサンをイトルフに貸与していた。これらのデッサンはイトルフの著作『シチリアの古代建築 (Architecture antique de la Sicile)』の図版<sup>68</sup>として掲載され、イトルフのポリクロミー理論の論拠の一つとなり、ポリクロミー論争におけるイトルフの説の優位性に貢献した<sup>69</sup>。

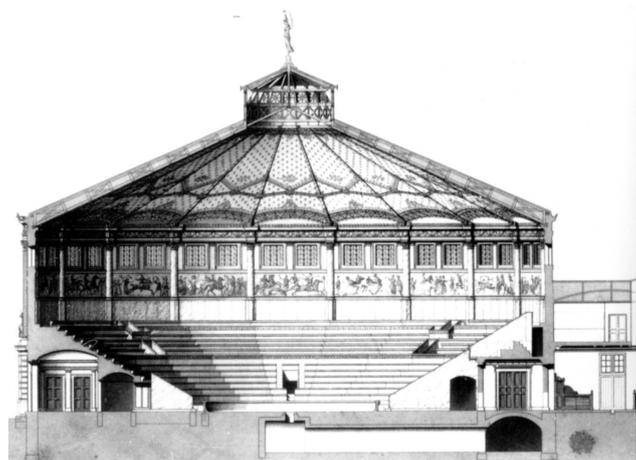


図13：ジャック・イニャス・イトルフ、「シルク・ディヴェール」、1852、RGA。

## 5. おわりに

アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代の修学と作品を外観すると、入学後僅か2年でローマ大賞設計競技で準優勝し、その3年後に優勝し、コンクール・デミュラシオン、プリ・デパルトモンタルなどの賞を数多く受賞した経歴からは、彼は同エコールのアカデミックな古典的鍛錬においても大変な優秀性を発揮したことが明らかになった。19世紀の文献にも彼のデッサン力や表現技術の高さがしばしば言及されているが、今回取り上げた計画案の構想力や表現力からもそれは見て取れ、デッサンからも彼はエコール・デ・ボザールの古典的な描写表現においても能力の秀でた人物であったことを改めて認識することができた。同時に「古代」への着目の観点から新鮮な側面を持っていたことは新しい発見であった。

一方、19世紀初頭のエコール・デ・ボザールは、ローマ大賞の制度や月例のコンクール・デミュラシオンによる設計能力の鍛錬を旨とする教育方針や教授陣など、我々の予想以上に、18世紀の建築アカデミー付属時代の建築教育の遺産を受け継いでいたことを理解できた。

加えて、コンクール・デミュラシオンを中心とする彼が制作した計画案を外観すると、自然史博物館や埋葬の建築などのプログラムには18世紀の学問を重んじる啓蒙性や革命前後の埋葬の建築、市民のための劇場など19世紀の市民の愉しみが主題となっているプログラムがあり、新鮮な発見があった。伝統を重んじる傾向や権威主義がしばしば指摘される一般的なエコール・デ・ボザールの印象とは異なる側面である。さらに、こうした主題のコンクールにラブルーストが能力を発揮したことは興味深く、また、同じアトリエの仲間も同様の主題で能力を認められた様子を考えると、本人達の能力に加えて、師匠であるアントワヌ・ヴォードワイエの存在も大きいように思われた。今回

取り上げたラブルーストの計画案には、啓蒙的な主題や硬質な幾何学の構成が見られ、これらは革命期第二世代の建築家達、ヴォードワイエやデュランの流れを汲んでいた様子が伺え、ラブルーストは18世紀の建築の革新性を継承する人物であったと解釈することができる。彼の計画案に見られるスフロの構造力学の試みへの理解は、後の彼の代表作品に開花する構造意匠における才覚を予兆させるものであり、これらの制作は彼の構造の力量の観点と18世紀の遺産の継承の二つの観点から論じることができる。

加えて、今回取り上げた計画案には啓蒙性や市民性の観点から20世紀を予兆する近代性が感じられ、学問の尊重や市民社会の成熟を反映するプログラムは19世紀における近代建築の萌芽の好例であった。ここには、しばしば古典と伝統の継承に終始したとするエコール・デ・ボザールの一般的な見解はあまり適切な認識ではなく、近代的な思想や近代建築へと繋がる新鮮な試みを行っていたという新しい発見があった。

本稿で論じた諸点を考慮に入れるならば、ラブルーストは、エコール・デ・ボザールの古典的な教育下においても師匠達や先達の建築家の試みを通じて18世紀の革命期の革新性を主に理念的な観点と構造意匠の観点から継承し、同時に近代建築を予兆する主題に取り組み、優秀な結果を残し、彼の才覚を發揮していた。後の彼の代表作品に見られる「革新性」や「転換」を導き出した源流の一つは19世紀のエコール・デ・ボザールにおける18世紀の革新性の継承と近代建築を予兆する主題と結論付けられるのである。

## 図版出典

1. 2. 10. *Les Prix de Rome* (1984), p.231, p.232, 184.
3. 4. 5. 6. 11. Dubbini, cura (2002), p.217, p.216, p.40, p.223, p.34.
7. 9. 12. *Académie d'Architecture* (1987), p.157, p.155, p.153.
8. Saddy (1977), p.6.
13. *Jacques Ignace Hittorff* (2011), p.46.

## 注釈

<sup>1</sup> アンリ・ラブルーストに関する主要参考文献：Saddy, Pierre., *Henri Labrouste. Architecte, 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites, Paris, 1977. Drexler, Arthur (ed.), *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts*, The Museum of Modern Art, New York, M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts, 1977. Middleton, Robin (ed.), *The Beaux-Arts and nineteenth-century French architecture*, Thames and Hudson, London, 1982. Zanten, David Van, *Designing Paris : Architecture of Duban, Labrouste, Duc and Vaudoyer*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts London, 1987. Leniaud, Jean-Michel (dir.), *Des palais pour les livres, Labrouste, Sainte-Geneviève et les bibliothèques*, Maisonneuve & Larose, Paris, 2002. coll., Dubbini, Renzo (cura), *Henri Labrouste 1801-1875*, Electa, Milano, 2002. coll., Bélier. Corinne, Barry Bergdoll,

Marc le Cœur, *Labrouste (1801-1875), architecte : La structure mise en lumière*, Cité de l'architecture et du Patrimoine, The Museum of Modern Art, Bibliothèque nationale de France, Nicolas Chaudun, Paris, 2013. ビエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブルースト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴虔編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。

- <sup>2</sup> 建築史概説に関する主要参考文献：ジークフリートギーディオ、新版『空間・時間・建築：1』、太田實訳、丸善、2002。ケネス・フランプトン、『テクニク・カルチャー：19-20世紀建築の構法の詩学』、松畑強、山本想太郎訳、TOTO出版、2002。ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築 2』、図説世界建築史14、土居義岳訳、本の友社、2002。三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。
- <sup>3</sup> 白鳥洋子、「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要第18号、pp.59-74、2012年3月。
- <sup>4</sup> Saddy, Pierre., "L'École des Beaux-Arts 1819-1824", Saddy (1977), p.4.
- <sup>5</sup> Levine, Neil., "The competition for the Grand Prix in 1824: a case study in architectural education at the Ecole des Beaux-Arts", Middleton (1982), pp.67-123.
- <sup>6</sup> Saddy (1977), pp.4-7.
- <sup>7</sup> 芸術アカデミーの変遷とエコール・デ・ボザールの設立に関する参考文献：Miyake (1982). Jacques, Annie, Emmanuel Schwartz, *Les Beaux-Arts, de l'Académie aux Quat'z'arts*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, 2001. Miyake (1982), pp.50-56. Jacques (2001), pp.7-11.
- <sup>8</sup> 一般的な用語の解説は『建築大辞典』、第2版、彰国社、1993。『仏和大辞典』、伊吹武彦著、他、白水社、1981。『広辞苑』、第六版、新村出編、岩波書店、2008。『ブリニカタ国際大百科事典』、2010。Encyclopédie Larousse en ligne, Encyclopædia Universalis. Éditions en ligne de l'École des chartes. を参照した。
- <sup>9</sup> Miyake (1982), p.50.
- <sup>10</sup> ibid. Bergdoll Barry., *Leon Vaudoyer: Historicism in the Age of Industry*, The MIT Press, Cambridge, 1994, pp.35-38. Jacques, Annie, *Les Beaux-Arts, de l'Académie aux Quat'z'arts*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, 2001, pp.8-10. 詳細は Shiratori (2012) に記述した。
- <sup>11</sup> Shiratori (2012), pp.64-65.
- <sup>12</sup> ナポレオンの没落の後にイギリスとタレーランの支持を得て、ルイ18世が1814年に王政復古を果たした。ルイ18世はルイ16世の弟であり、革命中はベルギーに亡命して反革命運動を組織した。即位後は極右王党派ユルトラ(Ultras)の支持を得て、欽定憲法である憲章を制定し、反動的な政治を行なった。
- <sup>13</sup> Miyake (1982), p.51.
- <sup>14</sup> ジャン＝バティスト・ロンドレ (Jean-Baptiste Rondelet) は18、19世紀の資料ではジャン・ロンドレ (Jean

- Rondelet) と記されることが多い。
- <sup>15</sup> 順序は 1816 年 1 月 1 日の芸術アカデミーの議事録の記載に従い、フォトイユ (fauteuil) の番号順とした。フォトイユはアカデミーで使われていた肘掛け椅子、同時に会員であることを示し、芸術アカデミーの建築部門のフォトイユには 1 から 8 の番号が付いていた。19 世紀の芸術アカデミーの議事録ではしばしばフォトイユの番号順が使用されている。ここでは氏名、生没年、会員選出年を記した。
- <sup>16</sup> 参考文献から筆者が確認。
- <sup>17</sup> Jacques (2001), p.7.
- <sup>18</sup> Miyake (1982), p.50.
- <sup>19</sup> エコール・デ・ボザールでは絵画、彫刻、建築、音楽の 4 部門において毎年コンクールが行われ、その優勝者にはローマ大賞が授与され、将来が期待される若く優秀な芸術家として 5 年間のローマ留学の恩恵が与えられる。奨学金が給付され、ローマのヴィッラ・メジチ (Villa Médicis) に滞在し、調査研究、並びに創作に専念する特権を有した。
- <sup>20</sup> ラブルーストに関する主要文献資料: Bailly, Antoine-Nicolas., *Notice sur M. Henri Labrousse*, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, séance du 16 décembre 1876, Firmin-Didot, Paris. Millet, Eugène, *Henri Labrousse, sa vie et ses œuvres (1801-1875)*, notice biographique, Extrait du Bulletin de la Société Centrale des Architectes, C. Marpon et Flammarion, Paris, 1879-80. Delaborde, Henri, *Notice sur la vie et les ouvrages de M. Henri Labrousse*, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, séance publique annuelle du 19 octobre 1878, Firmin-Didot, Paris. Coll., *Souvenirs d'Henri Labrousse: Notes recueillies et classées par ses enfants*, Imprimerie Cuënot, Fontainebleau, 1928.
- <sup>21</sup> Millet (1879-80), p.4.
- <sup>22</sup> Shiratori (2012), pp.61-62.
- <sup>23</sup> Millet (1879-80), p.4.
- <sup>24</sup> ibid.
- <sup>25</sup> Levine (1982), p.68.
- <sup>26</sup> Millet (1879-80), p.4.
- <sup>27</sup> 19 世紀のローマ大賞のテーマと受賞者については「ローマ大賞受賞者一覧」、Miyake (1982), pp.118-120 を参照。
- <sup>28</sup> Millet (1879-80), p.4.
- <sup>29</sup> Bailly (1876), p.5.
- <sup>30</sup> Delaborde (1878), p.4. ドラボルドは「この速さ」は「長い待機を予感させる」とし、後のパエストゥム論争とその後の冷遇を暗喩し、それらが「彼の才能の記し」であると述べている。
- <sup>31</sup> テオドール・ラブルーストはアンリの 2 歳年長の兄であり、同様にエコール・デ・ボザールで建築を学び、ヴォードワイエとルバに師事した。1827 年にローマ大賞を受賞し、在ローマ・フランス・アカデミー奨学生としてイタリアに留学した。1850 年代から 60 年代にかけて病院の建築家として活躍した。
- <sup>32</sup> *Henri Labrousse* (1928), p.10.
- <sup>33</sup> 参考文献掲載図版確認。
- <sup>34</sup> *Henri Labrousse* (1928), p.10.
- <sup>35</sup> 「ローマ大賞受賞者一覧」Miyake (1982), pp.118-120 から筆者考察。
- <sup>36</sup> 236.6. 「教会 (Église)」(1820)、平面図、立面図、断面図、415 × 495。236.7-9. 「自然科学者の家 (Maison d'un naturaliste)」(1822)、準優勝、全体俯瞰図、平面のエスキース、平面図、別館断面図、470 × 560。236.13. 「旅芸人の劇場 (Théâtre foraine)」(1822-1823)、立面図、断面図、平面図、1/200、610 × 430。236.6.21-22. 「議事堂 (Assemblée)」, 立面図、断面図、平面図、295 × 325。coll., *Académie d'Architecture, Catalogue des collections, 1750-1900*, Volume I, Académie d'Architecture, Paris, 1987, p.152. この「教会」の計画案は「教区の教会」と記されることがある。Maison d'un naturaliste は博物学者、自然主義者と訳され、ここでは自然科学者とした。「埋葬の礼拝堂」は、*Académie d'Architecture* (1987), p.152 では「議事堂 (Assemblée)」であり、同 p.236 では「埋葬の礼拝堂 (Chapelle de funéraire)」とされ、Dubini, cura (2002), p.34 では「共同墓地 (camposanto)」とされている。断面図の地上には墓碑が、地下階には納骨安置所が描かれていることから「埋葬の礼拝堂」が相応しいと判断される。
- <sup>37</sup> 現在は École nationale supérieure des Beaux-Arts であり、国立の教育機関である。
- <sup>38</sup> アカデミー・ダルシテクチュールは 1953 年にこの名称となった。現在も多数の会員を抱え、フランスを代表する建築、都市計画の組織である。直訳すると建築アカデミーであるが、フランス学士院のアカデミーではない。19 世紀半ば以降の建築と都市に関する図面などの資料を所蔵し、専門書籍を出版している。
- <sup>39</sup> Millet (1879-80), p.17.
- <sup>40</sup> ラブルーストのデッサンは 1976 年にパリのオテル・ド・シュリー (Hôtel de Sully) で開催された「アンリ・ラブルースト展」と 1975 年から 1976 年にかけてニューヨークの近代美術館で開催された「エコール・デ・ボザールの建築展 (The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts)」に多数が展示され、その際に子孫の家族が保管していたデッサンが整理され、一部がアカデミー・ダルシテクチュールに寄贈、委託された。
- <sup>41</sup> 18 世紀のローマ大賞の作品については主に Pérouse de Montclos, Jean-Marie., *“Les Prix de Rome” Concours de l'Académie Royale d'architecture au 18e siècle*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Berger-Levrault, 1984 を参照。
- <sup>42</sup> 18 世紀の各種コンクール入賞案を分析考察。詳細は他の機会で述べたい。
- <sup>43</sup> 主要参考文献掲載図版から考察。
- <sup>44</sup> Labrousse, Henri., “Travaux des Elèves de l'École d'Architecture de Paris pendant l'année 1839”, *Revue générale de l'architecture et des travaux publics*, tome I, Paris, 1840, pp.58-59. Saddy (1977), p.4. 「デシナター (dessinateurs)」は直訳すると「デッサンを描

く人」であり、「デッサン画家」、「挿絵画家」、「製図家」などと訳される。ここでは建築物のデッサンの表現力の意図から「製図画家」とした。

<sup>45</sup> Shiratori (2012), pp.60-61.

<sup>46</sup> 詳細は「ノートル＝ダム＝ロレット教会とローマの研究成果」、Shiratori (2012), pp.68-69 で述べた。

<sup>47</sup> ibid. テオドール・ラブルーストはアンリの2歳年長の兄であり、同様にエコール・デ・ボザールで建築を学び、ヴォードワイエとルバに師事した。1827年にローマ大賞を受賞し、在ローマ・フランス・アカデミー奨学生としてイタリアに留学した。1850年代から60年代にかけて病院の建築家として活躍した。

<sup>48</sup> ヌマ・ポンピリウス：紀元前8から7世紀のローマ第2代の王（伝説によれば在位715-673）。伝説を含み、実在したことは確実である。ロムルス王の次に王となり、平和な治世を行い、ローマの宗教儀式や12ヶ月の暦などを創設した人物とされる。ヤヌス神殿を建造し、ユピテル、マルスなどの神官団をおき、ウェスタ女神の巫女団を組織したとされる。

<sup>49</sup> ヤヌス神は古代ローマの神であり、前向き後ろ向きの2つの顔を持つ双面神。門や暦の始めである正月など、あらゆることの入り口や始まりを司ると信じられた。ヤヌス神殿は始源と同時にヌマの治世である平和を象徴し、戦争の時には同神殿の扉が開かれた。

<sup>50</sup> 博物学の「三界」とは動物界、植物界、鉱物界を示す。Saddy (1977), p.6.

<sup>52</sup> フェリックス・デュバン：建築家、エコール・デ・ボザール教授、芸術アカデミー会員。1823年にローマ大賞を受賞し、在ローマ・フランス・アカデミー留学生としてローマに滞在。代表作品はエコール・デ・ボザール校舎パレ・デ・ゼチュード (Palais des Études, 1838-1870)、その他にブロワ城 (château royal de Blois, 1844-1846)、ルーヴル宮殿のアポロンのギャラリー (galerie d'Apollon, 1848-1852) などの増改築を手掛けた。

<sup>53</sup> Saddy (1977), p.6.

<sup>54</sup> 主要参考文献図版から考察。

<sup>55</sup> ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン：建築家。プーレの弟子。エコール・ポリテクニク (École polytechnique) の教授。その講義書『プレシ・デ・ルソン・ダルシテクチュール』(Précis des leçons d'architecture) はフランスの伝統的な建築に正方形を並列配置し、平面に幾何学的規則性を与えたことで著名である。同著はロングセラーとなり、1802、1805、1813、1819、1821、1825年と再版された。ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン、『建築講義要録』、丹羽和彦、飯田喜四郎翻訳、中央公論美術出版、2014。

<sup>56</sup> アントワーヌ・ヴォードワイエについては Shiratori (2012), pp.62-66 で詳細を述べた。

<sup>57</sup> 「ローマ大賞受賞者一覧」、Miyake (1982), pp.118-120.

<sup>58</sup> ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォン：フランスの博物学者。啓蒙思想家として知られる。1739年に王立植物園の園長に任命され、終生その地位にあった。44巻に及ぶ大著書『博物誌』は『自然史』と

も訳され、地球の生成・歴史に関する推測を述べ、生物進化の観念を提起し、後の進化論に影響を与えた。ジャック・ロジェ、『大博物学者ビュフォン』、ベカエール直美訳、工作舎、1992。

<sup>59</sup> ルイ・ジュール・アンドレ：建築家。ジャン＝ニコラ・ユイヨ (Jean-Nicolas Huyot, 1780-1840) とイポリート・ルバの弟子であり、ラブルーストの後輩に当たる。ローマ大賞受賞者。代表作品は自然史博物館。

<sup>60</sup> ヴォードワイエの啓蒙的フリーメーソンとの交流と革命期の建築の傾向についての詳細は Shiratori (2012), p.63 に述べた。

<sup>61</sup> voir 36.

<sup>62</sup> ルドゥーからフォンテーヌ、ルバ、ラブルーストの設計補助の系譜と18世紀の意匠と構成の継承について、詳細を Shiratori (2012), pp.66-68 で述べた。

<sup>63</sup> 筆者確認。

<sup>64</sup> ヴォルフガング・ハルトウング (Hartung, Wolfgang) 著、『中世の旅芸人：奇術師・詩人・楽士』、井本响二、鈴木麻衣子訳、ユニベシタス叢書、法政大学出版局、2006。『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史』、マルギット・バッハフィッシャー (Bachfischer, Margit)、森貴史、北原博、濱中春、明石書店、2006。

<sup>65</sup> ibid.

<sup>66</sup> ジャック＝イニャス・イトルフ (Jacques-Ignace Hittorff, 1792-1867)：ケルン生まれの建築家。代表作品サン＝ヴァンサン＝ド＝ポール教会 (église Saint-Vincent-de-Paul, 1831-1841, 1831-1844)、コンコルド広場の整備 (place de la Concorde, 1837-1840)、北駅 (gare du Nord, 1863) により知られる。1830年に「ギリシア人における多彩色建築に関する論考」によりポリクロミー論争が起こった。col., Jacques Ignace Hittorff : précurseur du Paris d'Haussmann, Patrimoine Centre des monuments nationaux, Paris, 2011.

<sup>67</sup> シルク・デテ (夏のサーカス Cirque d'été, 1833-1841)：シャンゼリゼ大通りにあった馬術劇場。

シルク・ディヴェール (冬のサーカス Cirque d'hiver, 1852)：時代によりオリムピックのサーカス (Cirque-Olympique)、シャンゼリゼのサーカス (Cirque des Champs-Élysées)、国立サーカス (Cirque-National)、皇后のサーカス (Cirque de l'Impératrice) とも呼ばれた。馬術やコンサートなどが開催された。1899年頃に取り壊された。11区に現存するサーカス劇場。ルイ・ナポレオンに捧げられたことからシルク・ナポレオン (Cirque Napoléon) とも呼ばれた時代もあった。

<sup>68</sup> Jacques-Ignace Hittorff, Ludwig Zanth, *Architecture antique de la Sicile, ou Recueil des plus intéressants monuments d'architecture des villes et des lieux les plus remarquables de la Sicile ancienne*, 3 volumes, impr. Jules Renouard, 1826-1830, 1866-1867, Paris.

<sup>69</sup> 白鳥洋子、「アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流」、博士論文東京大学大学院工学研究科博士課程、2015、pp.58-59。